

小林信彦

唐獅子源氏物語

新潮社

唐獅子源氏物語

小林信彦

七重八重

花は咲けども山吹の

人妻の心

われあらめやも

新潮社

からじしげんじものがたり
唐獅子源氏物語

定 価 八八〇円

印 刷 昭和五十七年十二月一日

発 行 昭和五十七年十二月五日

著 者 小林信彦（こばやし のぶひこ）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

182 東京都新宿区矢来町七丁目 振替東京四一八〇八

電話 業務部 03(266)5111 編集部(266)5411

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 植木製本株式会社

©1982 Nobuko Kobayashi, Printed in Japan.
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

唐獅子選手争奪	5
唐獅子渋味闘争	41
唐獅子異人対策	79
唐獅子電撃隊員	117
唐獅子源氏物語	155
唐獅子紐育俗物	191
唐獅子料理革命	229
あとがき	269

装 装
画 幀
河 平
村 野
要 甲
助 賀

唐獅子源氏物語

唐獅子選手争奪

ストーヴリーグ

まず、自己紹介が必要であろう。

《不死身の哲》こと黒田哲夫が私の名前だ。

軽薄なるマスコミが《仁義なき戦い》と名づけた、いわゆる広島抗争の数少い生き残りでもある。いや、生き残った者は大勢いるが、大半は《現場》を離れ、偉くなるか死ぬかのどちらかになった。いまだに《現場》で突っ張っている、私のような阿呆は、数が少いのである。

さて、現在の私は、大阪ミナミの二階堂組組長という立場だ。

ひとことで言うなら、二階堂組は、西日本を支配せんと志しているあの須磨組の傘下にある無数の組の一つに過ぎない。私たちの当面の敵は、同じミナミの島田組であるが、今のところ、硝煙は、なんとか、しずまっている。私たちの当面の敵は、同じミナミの島田組であるが、今のところ、硝煙は、なんとか、しずまっている。(つけ加えておくが、島田組は反須磨組を旗印とする団体の一つであるが、事情あつて、このところ、鳴りを潜めているのだ。)

では、おまえは暇だろう、と言われる向きがあるかも知れない。

言いわけではなく、わし、いや、私は暇がないのである。

理由の一つは、二階堂組が、本家・須磨組の社内報の編集を引き受けていることにある。この社内報「唐獅子通信」は、須磨組傘下の全団体に配布されるものであり、徒やおろそかに作れるものではない。

もう一つの理由は——言いにくいことではあるが、須磨組大親分、須磨義輝の一風変った性格にある。西日本はおろか、日本中を制覇しようと考へながら、なかなか野望を果せない理由は、案外、大親分の内部にあるのではないかと、ひそかに私は考へている。その性格のおかげで、私がいかに忙しくなるか……いや、こんなことは説明するまでもない。以下の物語を読んでいただければ、容易に理解されるはずである。……

一

師走に入つて間もなく、私は、坂津市に住む大親分から電話を受けた。たのみたいことがあるから、すぐ、きてくれ、というのだ。

——ダーク荒巻を連れてくるのじゃ。

大親分は、そう、つけ加えた。

(またかいの……)

私はうんざりした表情で送受器を置いた。どうせ、ろくでもない用件に違いないと心の中で呟きながら、私はインターフォンのスイッチを入れて、ダークを呼べと命じた。

「お呼びでつか？」

もとプロレスラー、現在はテレビ・タレント、という風変りな極道のダーク荒巻が、揉み上げを長くしたいかつい顔で、社長室に入ってきた。

「おまえ、また、グリーンの背広、作ったのか」

水玉模様の蝶ネクタイを締めた緑色の四角い身体を見た私は、またまた、うんざりした。

「へえ」

「坂津へ行くんじゃ。大親分は、おまえを連れてこい、言うたはる」

「外は木枯しでっせ」

ダークは一人前に寒そうな顔をする。

「車、用意しまほか」

「電車の方が早いやろ。梅田から、正味一時間や」

私たちが通されたのは、紫色の高級絨緞じゅうたんを敷きつめた、三十畳はゆうにある洋間だった。

ここは大親分の書斎であり、壁にかけられた数々の表彰状、飾り棚の上の金びかのトロフィー群や楯が、主人の偉大さを、いやが上にも盛り立てている。黄色い牙をむいて声もなく吠えている剝製の牡ライオンや、ステレオのスピーカーに描かれたシンボル・マークの唐獅子は、いつもと、まったく変らない。

いや、少しは変わっているとこもあった。牡ライオンの頭に小さな野球帽がかぶせてあるのだ。そして、野球帽が滑り落ちないように、その上に、ブルドッグの干し首が乗せてあった。大親分を怒らせて撲殺された、あのブルドッグの首である。

突然、スピーカーから、ややずっこけ気味のコンバット・マーチが鳴り響いた。

私は野球にはほとんど関心のない男である。しかし、今年の夏は、耳にたこができるほど、こいつを聞かされた。一時、阪神が優勝するかも知れないと噂されたころ、私は、大阪、神戸、坂津——いたるところで、この騒音に襲われた。あるいは、私の被害妄想だったのかも知れないが……。

「待たせたの」

和服姿の大親分が悠然と姿を現した。

「そのままでええ。固苦しい挨拶は抜きだ」

「は……」

大親分が椅子に腰をおろすのを待って、私とダークはソファーに腰かけた。

「哲よ」

大親分は不気味に笑って、

「年末で忙しいことは、よう、わかつとる。そない苦い顔をすな」

「いえ……わたしが参つとるのは、この音で……」

「お、これか」

大親分は卓上のリモコン操作で、コンバット・マーチを止めた。

「どや、落ちついたか？」

「へえ」

私は頭をさげる。

若い女中がビールを運んできた。暖房のきいた部屋でビールを飲むのは悪くない。

「乾杯といくか」と大親分は微笑した。

「遅ればせながら、広島カープの日本一達成を祝して」

あれ、と私は思った。私の記憶する限りでは、大親分が野球に関心を抱いていたことは一度もなかったはずである。無関心、というよりも、むしろ、野球嫌いであったと思う。それも、むしろ、近畿グレート・リングの選手に愛人のホステスを奪われた、といった生臭い理由からであったのだ。

「そうか、哲は野球に興味がなかったんやな」

大親分はそう呟くと、顔をダークに向けて、

「わしは、こう、思うのや。——そら、江夏は最高級のプロや。三村も、まあ、ええとしよう。

けどな、わしら極道サイドから見て、心を打たれるのは、なんちゅうても、高橋慶彦よしひこのあの若さとガッツや。あれこそ鉄砲玉の心意気じゃ。わしは高橋の活躍で、野球の魅力いうもんが分った。

大衆が野球場に詰めかけ、テレビにかじりつくのが、よう分った……」

（なんじゃい）と私は肚はらの中で呟いた。

（要するに、野球の面白さが分ったということか。つぎは、高橋慶彦の銅像でも作りたいいうんかいの）

「わしがハッスルするぐらいやさかい、広島方面の極道どもは狂喜乱舞やろ。ゆんべ、遊びにきた広島の宇野組組長な。哲、覚えとるやろ、おとぼけのウーやん」

「へ……」

「あのウーやんが言うのとった。カーブに狂うだけやのうて、敵味方あちこちの極道が独自の野球チームを作つとるらしい。宇野組は、広島オイスターズいうチームを作つて、フロリダでトレーニングやるとか言うのとったよ」

「本格的ですなあ」

ダークは感心してみせる。

「そないなムードがあるんで？」と私は憮然として言った。「それで、わかった……」

「なにが？」

大親分は鋭い眼光を私に向けた。

「ミナミの島田組ですわ。組長みずから監督になって、サザン・アイランダースたらしいチームを作るとききました」

大親分は軽薄に指を鳴らした。

「それ、それなんじゃ。……おんどれ、島田清太郎に先を越されたか！」

「サザン・アイランダースで、なんや、ハワイアンのバンドみたいやな」

英語に強いダークは、ぶつぶつ呟いていたが、

「あつ、そうか！」

「なんじゃ？ はよ言わんかい」

大親分は不機嫌そうに催促する。

「ヘミナミの」が、サザンですわ。ヘアイランダーズは、島の人々の意味です。つまり、島だあ——島田組いうわけです」

「先を越されたぞ、英語でも」

大親分は口惜しげに叫んだ。

「こうなったら、意地でも、最高のチームを作らな、わしの名が廃^{すた}るわい。……ええか、黒田、これは至上命令じゃ。アマチュアで最高最強の野球チームを作るんじゃ。幸い、ドラフトなんちゆうもんは関係ないさかい、金に糸目はつけん。さっそく、メンバーを集めい」

「待って下さい」

私は慌てた。

「お気持は、わかります。けど、わたし、野球いうたら、皆目、見当がつきまへん。メンバー集めるいうても……」

「ダークがおるやないか」と大親分は平然としている。「それに、おまえとこには、知識人の原田もおる。ええか、これは親の命令じゃ」

「けど、監督の問題もありまっしゃろ」

私は浮かぬ口調で呟いた。

「それやったら、プロ野球の某大物を呼ぶ準備をしておる。おまえが心配することはない。チームの名前から、もう決つとる」

「え？」

ダークと私は、びっくりした。

「坂津レッド・ライオンズや。どや、強そうな名前やろ」

大親分は得意顔である。

「〈唐獅子〉の直訳ですな」

啞然としていたダークが、ようやく、それだけ言った。

「もう一つ、話がある。『唐獅子通信』に野球のページを作るのじゃ」

私は頷いた。こっちの方は、容易いことと思えた。

「くりかえすようだが、軍資金は充分にあると考えてええ。億単位の金が用意してあると思てくれ。……しかしだ、大切なのは野球を心で把握することや。野球賭博の発展・向上のためにも必要やぞ」

「そこです」と私は力なく応じた。「心で把握するというのが、私には……」

「師匠がおるよ、その方面の」

大親分はにんまりして、

「帰りに、その金泉寺に寄ってくれ。学然和尚が野球の精神を説くと言うておる。戦前に、アメリカにおったころ、本場の野球をよう見たらしい。あの和尚、今度は、本気になっておる」

二

「おやっさん……」

ダーク荒巻に突つかれて、私は眼を覚ました。

なにしろ金泉寺の縁側は陽当りがいいのである。厚い座布団にすわって、和尚の〈野球哲学〉とやらを拝聴しているうちに、うとうとしてしまったのだ。

（もう、一時間、たつとる）

こっそり腕時計をみて、私はひそかに呟く。

「……いま、述べた通り……」

学然和尚は、私の顔をじろりとみて、

「野球に必要なのは、〈機〉じゃ。〈機〉をとらまえることじゃ。きいとるのか、黒田はん？」

「きいとりま」

「ご存じの通り、わしはサーフィンの天才とうたわれておる。サーフィンで良い波をつかまえる直感——これも〈機〉じゃな。〈機〉は、野球にも、サーフィンにも、必要じゃ。つまり、野球とサーフィンは、一つものなのだ……」

「はあ」

どこか、おかしい気がした。この和尚の理屈は、いつも、疑わしい。

「そんなら、わしらの喧嘩も〈機〉に左右されまっせ」

ダークが、そこを突いた。

「女子を口説いて押し倒すのも、〈機〉ですわな。ほな、喧嘩も、女子も、野球も、サーフィンも、いっしょやいう、けつたいなことになる」

「俗人めが」

学然は超然としたままで言葉が続ける。

「志を高く持て。わしらはスポーツの話をしとるんじや」

「すけこましもスポーツでつけど」

「ダーク、控えい」

われながら奇妙にきこえる言葉で、私はダークに牽制球を投げた。

「わしら、むつかしい説法は要らんです。どないしたら、最強のチームを作れるかということが、問題なんや」

と、ダークは強調する。

「ふ、ふ……」

学然は法衣のままで、ご本尊の前の供え物である白い饅頭を一つ、つかみ上げた。そして、宙に投げ上げると、

「その点を、わしが考えとらんと思ふのか。ああ？」

ダークは氣圧されて沈黙した。

「はつきり言うてな、広島オイスターズ、尾道ラスカルズ、因島パイレーツ、丸亀タートルズ、天狗森マザーファッカーズ、猿川モンキーズ、さらに大阪のサザン・アイランダーズも、打撃力は、そう大きな差はないと、わしは睨んどる。須磨義輝がいかに金を積んでも、そこらは変らんと思う。……さすればじゃ。勝敗を決めるのは、投手と考えるべきではないか」

私は頷いた。いかに素人の私でも、投手戦という言葉ぐらいは、ききかじっている。

「しかも、あんたらは時間がないときている。選手の育成など、とても間に合わん。出来合いの選手を集めるしかない。……ま、これは、わしの一案だが、こういう投手を探すのじゃな」

学然は妙な手つきで饅頭をつかんだ。

「わかるか？」

私はぼんやりしていた。

「あ、あれや。ナックルボールや」

ダークが、けたたましく言う。

「さよう。……しかし、日本で、通常、ナックルボールと称されておるものとはちがう。大リーグのナックルじゃ。たとえば、フィル・ニークロな。さきごろ、来日したろう」

「テレビで観ましたで。四十歳ときいて、びっくりしてもた」

「わしの言うてるのは、かつてのホイット・ウイルヘルム投手が切り札にしたナックルボールとか、フィル・ニークロ投手の何段階にも変化するナックルボールのことじゃ。このナックル

道を究めた投手がいれば、坂津レッド・ライオンズは百戦して危うからず、だな」

「お言葉でつけど」と私は口をはさんだ。

「そんな天才が、そこらへんに、うろうろしとるとは思えまへんな」

「なに、磨かざる珠がおれば、わしが教えてつかわす。ホイット・ウィルヘルム直伝のナックルをな……」

「失礼でつけど、ほんまに、野球を？」

「黒田はんに説明しても、わかるかどうか。しかし、ダークはわかるはずじゃ」

学然は饅頭をつかんだ指をダークの前に突き出した。

「ほれ、手首は絶対に曲げない。関節で投げるのじゃ。球が手から離れる瞬間に、指先で球にまったく回転をあたえないように押し出す。あとは、空気の流れと湿度によって、球はおのずと変化する。よいか。球を三本指で支えるのだ。手が大きくないと、これはむずかしい」

「大きくても、むづかしいわあ」

ダークは招き猫のような手つきをした。

「ナックル道はきびしいぞ」

学然はきびしい顔つきで言った。

「なんせ、投げとる本人さえその行方をつかめんという、『素人うなぎ』的魔球じゃ。……そうそう、黒田はん、もうひとつ、ききたいことがあるという話でしたな」

「はあ」

私は頭を軽くさげて、

「大親分は『唐獅子通信』に身内の野球のページを作れ、言うてはります。場合によっては、半分以上を野球に割けと……」

「そら、むちゃだ。社内報の半分を、野球記事で埋めるなど」